

## 熊倉武教授御逝去をいたむ

神奈川大学法学部長

春 宮 千 鐵

熊倉教授と私との個人的交遊については詳しく述べる必要はない。ただ、氏を静岡県立法経短大の創立にあたって紹介したのは私であった（現在、国立静岡大学へ統合）。その際私も同道するはずであったが種々の理由から赴任をとり止めた。そのため違約の責任を追求すべく何回か拙宅に來られた、あの頃の氏の元気を思うとこの二、三年心なしか弱られたようにも見受けられた。決して弱音をはかない氏にしてはめづらしく疲労をうったえられた東京近くへ來たい由をもらされた。たまたま神奈川大学法学部は目下優秀な学者を求めていた時であるので氏が本學に來られることは法学部にとって望外の幸であった。私としても静岡以来の約束をはたし同僚として研究を共にすることのできることとなり何か生き甲斐をさえ感ずるものがあつた。神大法学部の同僚諸氏も熊倉氏の素朴な人柄、學問への熱

情に心から敬意を表し信頼していた。しかるに赴任半年にして突然の逝去にあい呆然自失の態である。私にとっても大学にとっても、否、刑法学会にとっても得難い人材を失ってしまった。

氏の社会的、学的活動及びその人柄については氏が青年時代から最も尊敬していた恩師風早八十二先生が弔辞の中で詳細に述べておられる。熊倉氏を本当に知る先生の弔辞には切々人の胸に迫るものがあり、これに何も加えるものはない。幸、風早先生より弔辞の掲載を心よく御承認頂いたので、ここに載せ、生前の熊倉氏をもう一度心に浮べたいと思う。

一九七二年十一月二十五日

付記 風早八十二先生は本学の前身横浜専門学校時代に講師として刑法講座を担当されたことのあるのも何かの因縁であろう。熊倉氏の教歴及び業績表の作成には岩崎二郎教授があたりられた。尚氏の葬儀に際し、種々御配慮下さった山火、菊池両講師、大学院生及び大学事務当局の方々にも、この紙上を借りて厚く御礼申上げる。